



KSW 企画「論理的文章力養成講座」

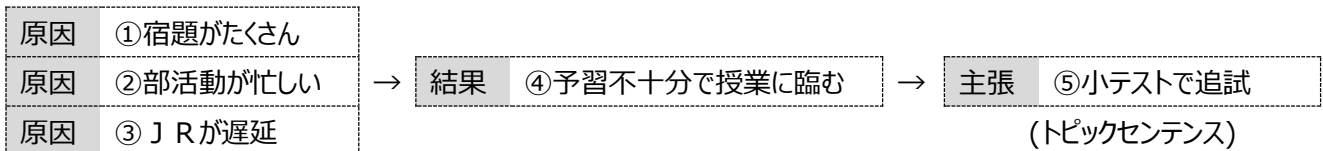
～ パラグラフ・ライティングを身につけよう ～

() 年 () 組 () 番 氏 名 ()

文章の論理を理解するには、文と文との構造をしっかりと把握する必要があります。文章の中で、どのように各文がつながっているのか図示し、文章の論理的構造を理解する力をつけましょう。

例文) 昨日は①宿題がたくさん出た。②部活動も忙しく、帰りの③ J Rも遅延したため、今日は④予習が不十分なまま授業に臨んだ。案の定、⑤小テストで追試になった。

この文章の構造は次のとおり



問 1 次の文章におけるトピックセンテンス (= 主題文) を 3 つ取り出し、①～⑩の番号で答えよ。

(時間の目安 : ①読解 3 分, ②構造化 2 分)

①産業革命以前のテクノロジーは「道具」——すなわち動力源を持たない器具を中心に組織されていた。②さまざまな器具類や武器は、一般的には人間の身体機能の模倣から生まれている。たとえば、③武器は爪や歯の延長であり、ハンマーは拳の延長であり、車輪や馬車は足の延長である。④それらは人間の身体機能を拡張するものであった。

したがって、⑤それらはマイスター(名人, 巨匠)の技術——すなわち特殊な身体技能を身につけた特権的な職能集団や個人に帰属する技術であったとすることができるだろう。⑥長い間の身体的訓練を経て、道具や家畜を上手に使いこなし、ものを製作する集団や個人こそが技術の主体であり、そのことは疑いなく明白なことであった。

だが、⑦それらは同時に、自然や人間の身体の性質に関する——一般的な理論的認識に基づいたものであったことも確かである。なぜなら、⑧アリストテレスも言っているように、「教える／学ぶ」ことができるものであることが技術の特性だからだ。⑨この可能性を欠いた技術は誰にも引き継がれず消滅してしまうだろう。たとえば、⑩前近代におけるもっとも複雑な技術的構築物である建物や船などの大規模建造物、あるいは都市施設などは、複合的で深められた膨大な知識の流通や集積を前提としなければ考えられないものであっただろう。

ヒント : ①～⑩の文章を図示すると、どのような構造になるか考えてみよう。

解 答

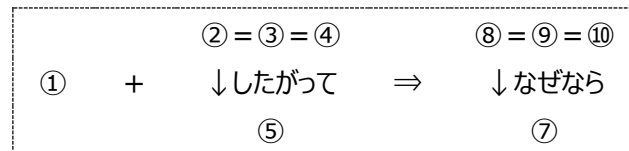
【職員用資料】

仮説1：論理的思考力の育成

授業や課題研究の中に、根拠・理由付け・主張をする場面を組み入れることで、論理的思考力を育成できる。

問1 解答

文章全体の構造は次のとおり。



まず①で、産業革命以前の技術は道具が中心であったと述べられる。

そして、②「道具は身体機能の模倣から生まれた」と主張が付加される。

③は武器、ハンマー、車輪、馬車といった具体例で②を解説したもの。

④は③をさらに解説したもの。つまり、(② = ③ = ④)である。

⑤の前の「したがって」は前の部分を根拠として受けるが、①は⑤以降の根拠ではないから、除外する。

⑥は⑤の解説。それゆえ、この「したがって」の接続関係は「②③④。したがって、⑤⑥」となる。

以上から、ここまでの主張文として①と⑤が取り出せる。

①を見落としがちだが、①は②～⑥のまとまりとは別にひとつの主張として立っている。

⑦の前に「だが」がおかれ、ここで方向が転換するが、①の方向が転換するわけではない。

①という大枠のもとで議論が進んでいる。主張文だけを取り出すならば、「①。そして⑤。だが、……」となる。

「なぜなら」という語によって明確に指定されているように、⑧は⑦の理由を与える。⑨は⑧の解説。

⑩では建物、船、都市施設を例として知識の流通や集積を問題としており、⑧⑨に対する例示とみなすべき。

以上から、⑦～⑩はひとまとまりを成し、トピックセンテンスとしては⑦が取り出せる。

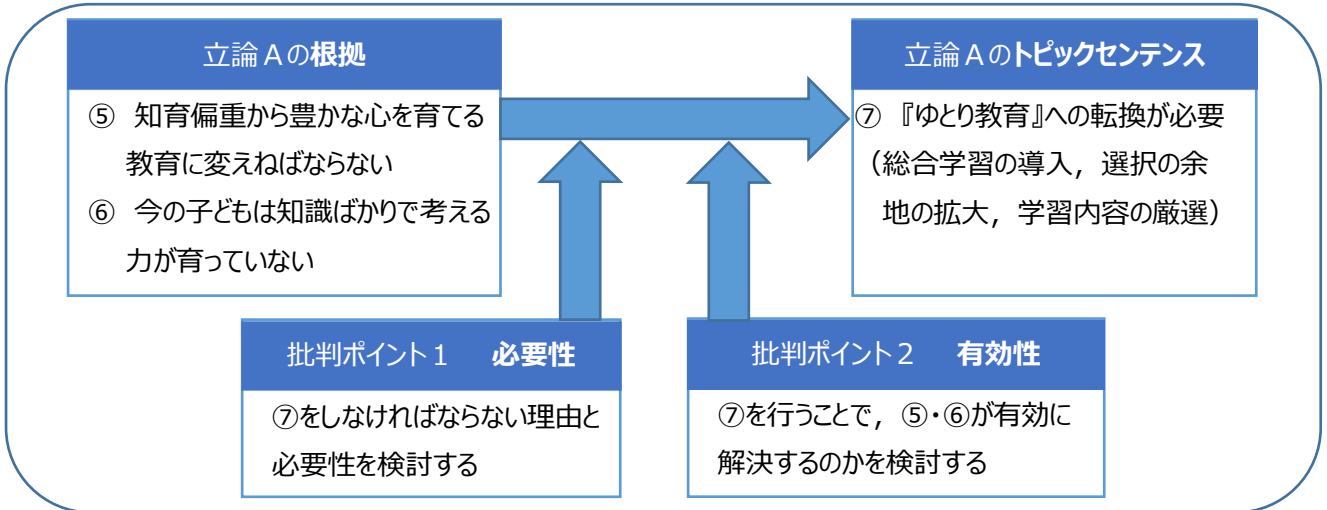
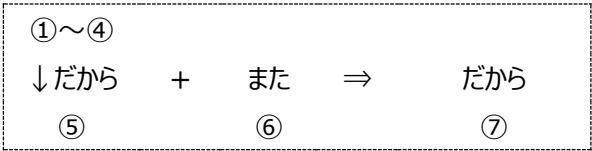
解答 ①, ⑤, ⑦

仮説 2 : 批判的思考力の育成

学習活動において、課題を根拠に基づいて多角的に吟味し、適切に分析し最適解を見いだす過程で、批判的思考力を育成できる。

問 2 解答

立論 A の構造は右のとおり。



批判ポイントを参考にすると、立論 A に対しては次のような批判が考えられる。

- (1) 受験の弊害が根拠として挙げられているが、立論 A は受験体制の改革については何の提案もしていない。
- (2) 知育偏重をやめるべきだと言うが、ここには、知育偏重の教育が時間のゆとりをなくし、かつ、心のゆとりをなくすという前提がある。しかし、その前提は本当に正しいのか。例えば、学校教育が知育のみに関わるものだとしても、それゆえに子どもから時間のゆとりを奪うことにはならない。(それは知育教育のやり方に依存する)
- (3) 知育教育が心のゆとりを奪うというのも、知育教育と情操教育を相反するものとする前提に立っているが、知育教育と情操教育は必ずしも相反するものではないのではないか。
- (4) 考える力を育てるために総合学習を導入すべきと言うが、それがふさわしい形態なのかは慎重な検討が必要である。考える力を育てるには、むしろ周到に用意された学習環境の中で特定の話題をじっくり議論することが有効ではないのか。安直な総合学習の体制とプログラムしか作れないのでは、かえって害があるのではないだろうか。

解答例 **立論 A を批判するならば、受験とゆとり教育の関わり、知育教育と情操教育の関係、考える力を育てるためのゆとり教育の有効性といった点に触れなければならない。**しかし、B はそうしたことは何も触れておらず、**批判なき異論**となっている。また、「授業時間を減らしてもゆとりの実現にはならない」と主張しているが、立論 A は授業時間削減について何も主張していないので、これも立論 A に対する批判にはなっていない。(194 字)

【出典】 立論 A 大野晋・上野健爾 2001『学力があぶない』岩波新書
 批判 B 大森不二雄 2000『「ゆとり教育」亡国論』PHP 研究所